

綱取り不動さま

皆会津の国、阿佐野村にゆく裏街道があった。守屋村から滝新田村をとり大倍おほばいを越え、にわとり峠を下って米や魚を運び、会津からは特産の「ろうそく」をもってきても言われている。

大倍おほばいは山のそね道で岩がごろごろして五十米もあらうか、下には金喰川があり眼もくらむような場所だった。

口伝えによれば義昭法師さまが、自然に岩に刻まれたお不動さまの梵字ぼんじをみて、私のかねがね心に思った仏であったので、仏の導きにちがいないと、この地に庵をつくり、鐘を鳴らし、読経よみぎょうをしては行ぎょうをしていたという。

ある日この大倍おほばいで、会津に馬で荷を運んでいた弥平次、五郎兵衛、喜惣太の三人は、深い霧に包まれて一寸先も見えない朝のこと、突然すつとんきょうな声で喜惣太が「おれの馬がいねい」と叫んだ。弥平次と五郎兵衛は「馬が先にいったんだべいぞ」と互に顔を見合わせていった。この下に落ちたら馬は助かんねいなあ、喜惣太は顔の色がなかった。下に落ちて探すしかあめえな」と三人が山をおり

ていった。そのとき川の方から馬のいななきがした。川に
ついた三人は驚いた。

馬がひとつの怪我もなく、四つ足をふんばって立っているではないか。喜惣太は信心しなかったので「ばち」があったと思ひ込んでしまった。年上の五郎兵衛は「喜惣太おめい、お不動様に助けらっしゃんだぞなあ」と三人はお不動さまに手を合わせ深く礼を申したそうだ。

その後村人たちは、お不動さまをふんではと下に道をつ
くって歩いたという。